小銃　数千
軽機　約四百
重擲弾筒　右ト略同数
重機　約二百
迫撃砲及其他砲　各約十

右兵器ハ第一線部隊及特設部隊ニ交付セリ之ガ為歩兵各々器ハ者ラ充実シ主陣地帯一粁ノ面軽機、重擲各約三十五、重機約十ノ密度トセリ

2. 弾薬関係

各種火器概ネ一会戦分(野戦重砲及高射砲ニ在リテハ(会戦分))ヲ保有シ殆其ノ全数ヲ第一線兵団部隊ニ交付保管セシメタリ

但シ軽迫撃砲ハ一門アタリ僅カニ三百発ヲ保有スルニ過ギズ陸海軍合シテ二百門ニ餘ル有力ナル迫撃隊ガ平分間ハ発射弾数ヲ有スルニ過ギザルガ如キハ実力零ニ等シト謂ハザルベカラズ軍ハ昭和十九年秋以来百方手段ヲ盗ミテ弾薬ノ充実ニ奔走セシモ目的ヲ達セズ戦斗勃発直前ニ漸ク中支ヨリ代用弾トシテ九三式歩兵砲弾薬約十万発ノ交付ヲ許ラレタリ

然レドモ時機既ニ遅ク其ノ大部ハ輸送途中奄美大島附近ニ於テ海没スルカ若ハ鹿児島港ヲ出帆スル能ハズ結局軍ガ機帆船ニ積ミ換ヘテ行フ等凡ユル手段ヲ盗ミテ入手シ得タルハ約一万五千発ニ過ギズ多数ノ迫撃砲ヲ擁シナガラ戦斗ニ際シ其ノ成功ヲ発揮シ得ザリシハ遺憾ノ極ミナリ

3. 糧秣関係

集積量ハ各島嶼ニ依リ若干ノ相違アルモ各部隊概ネ昭和二十年九月末頃迄ノ分ヲ保有セリ其ノ集積区分ハ弾薬同様殆其ノ所要全量ヲ各兵団部隊ニ交付シ軍トシテハ予備糧秣ヲ保有セズ

4. 燃料

自動車燃料ハ常ニ欠乏状態ニ在リテ作戦準備ヲ阻害セントモ天ナリ作戦用燃料ハ各部隊ヲシテ厳重ニ保管セシメタリ

航空用燃料ハ昭和二十年一月ニ於テ伊江島及沖縄地、中各飛行場ニ合計約五千キロリ集積シアリ軍ハ状況緊迫ニ鑑ミ万一ノ考慮シ其大部ヲ主陣地帯内ニ移送集積シ置キ遂次所要ニ応ジ前記各飛行場ニ補給スル方式ヲ取リ漸次態勢変換

二 勉メ特ニ友軍航空部隊ノ展開不能ノ見込ミ判然トセル三月以降
極力之カ促進ニ努力セルモ輸送難ノ為意ノ如ク進展セズ戦斗開始
後全量ノ三分一内外ヲ敵手ニ委スルニ至レリ

十四、築城及交通

1、築城ハ物量戦法対策トシテ軍ノ最モ重視セル事項ノ一ナリ
陣地編成ハ洞窟ノ規模ハ(切ノ人員ト)砲弾薬
株其ノ他ノ資材ヲ之ニ収容シ且其ノ強度ハ敵戦艦ノ主砲弾ニ
耐ヒ爆弾ニ抗堪スルヲ目途トセリ戦斗開始迄ニ完成セル主陣地帯
内洞窟ノ総延長ハ約百粁ナリ
沖縄島ニ大ハ無数ノ自然洞窟(大ナルモノハ一千人以上ヲ収容シ得)散在シ
若シ軍ノ築城ヲ容易ナラシメタリ

2、陣地編成ニ当リテハ敵ノ攻撃ヲ受ケザル正面ヨリノ兵力増加ヲ顧慮
シ各部隊ハ自隊ノ三倍兵力ニ應ズル築城ノ完成ヲ期セシモ昭和十九年
十二月末実施セル作戦計書ノ根本的変更ニ伴ヒ之ニ起因スル作戦
準備日数ノ短少等ノ為各部隊ハ自隊ノ築城ノミヲ概成シ得ルニ止マレリ

3、対戦車築城ハ其必要性ヲ痛感シテ努力シ内坑道陣地及対戦車地雷地帯及対戦車壕(木規模ノ構築)ニ主要
交通路ノ阻絶、破壊等ヲ実施セリ就中対戦車壕ハ大規模
徹底的ニ実施セントスル企図ナリシモ作業ノ大部ヲ飛行場設定ニ
充当セシト作業日数ノ短少ナリシ為意ノ如ク進捗セザリシハ遺憾ナリ

4、洞窟陣地構築ノ為ニハ多ナル坑木ヲ必要トシ一兵団ニテ最小
限度数十万本ヲ要セリ是等坑木ハ沖縄島南部地区ニ於テハ入手
シ難ク遠ク(台湾)頭山猫地帯ニ求メザルベカラズ之カ為軍ハ其伐採
地域ヲ各兵団ニ区分配当シ各兵団ハ之ニ基キ夫々伐採班(所
団ニ於テ数百名ノ兵員ヲ基幹トセリ)ヲ編成派遣シ専ラ従事セリ
坑木ノ伐採地域ヨリ築城地域ヘノ輸送ハ人員不足ナル為主トシテ海運ニ
依ラザルベカラズ之カ為軍ハ金島内ニ於テ牧業ヲ得タル割毋
約七十隻ヲ各兵団ニ分属シ更ニ南方廻航ノ機帆船及輸送船
ノ那覇港滞留期間ヲ利用(之ヲ内陸輸送ト称シ船舶輸送)

司令部沖縄支部ニ任ズ）セリ
然レドモ昭和二十年一月以降ハ連日「レイテ」方面ヨリ飛来スル B24 ノ攻撃
並ニ数度ノ大空襲ニ依リ妻沈破セラルヽモノ多ク且之ヲ回避スル為
夜暗ヲ利用セザルベカラザル状況トナリ所望ノ如ク輸送効率ヲ
発揮シ得ザリキ
築城ノ進度ハ坑木ノ入手量ニ依リ決定スト雖モ各部隊ノ声ニヨリ
事実坑木ナクシテ洞窟ハ極端ニ能率ヲ低下セリ崩壊
死傷続出スルノミ坑木ノ入手不足カ軍ノ築城ヲ遅滞セシメ
タル点ハ真ニ計リ知ルベカラザルモノアリキ

5. 道路ノ新設擴張

軍ハ捷号作戦準備ノ為北中飛行場地区ト南部島尻地区トノ間
ニ軍主力ノ機動路トシテ四條ノ道路ヲ補修若ハ新設ニ着手シ其ノ
作業方ニ概ネ成セントシアリシガ天号戦ニ転移後ハ其ノ必要ナキニ至
レル為之ヲ中止シ爾後ハ主陣地帯内特ニ首里南北ニ於ケル
砲兵機動ノ為ノ道路網整備ニ専念セリ

十五、通信

1. 無線通信

第十方面軍及大本營トノ間ニハ二通信系ヲ保持ス
軍隊下各島守備兵団トノ間ニハ航空通信ヲモ含メ概ネ一
通信系ヲ保持ス
沖縄本島内ニ於ケル無線通信ハ国頭支隊及伊江島トノ間ヲ除
ク戦迄概ネ訓練ノミニ止メタリ

2. 沖縄本島内有線通信

概ネ所望ノ如ク完備セリ
伊江島ト本部半島トノ間ニハ海底線ヲ敷設シタリ

3. 対砲爆掩護装置

無線送受信所ハ分散シ且洞窟内ニ収容シ一部ノモノハ
コンクリート製衣トセリ有線通信網中重要幹線ハ地下線トセリ

4. 電探ハ各主要島岐ニ配置セリ

沖縄本島及ビハ陸軍ト共ニモ数ヶ所ニ設置シ成績良好ナリ

〃百数十粁普通ハ七十粁ノ地点ニ於テ敵ノ進入ヲ探知セリ

5. 局地的補助通信トシテ犬鳴等モ相当数準備シ且之ヲ利用セリ

十六、海軍部隊トノ関係

1. 南西諸島ニハ沖縄方面海軍根據地隊司令官及第四海上護衛隊司令官（同一指揮官両者ヲ兼ス）指揮下ノ部隊ヲ配置シ海軍航空隊関係ノ部隊配置セラレアリ根據地隊及海上護衛隊ニ属スルモノニハ防空隊海岸砲台守備隊護衛艦艇部隊等アリテ航空部隊ノ配置ト相関聯シ奄美大島、喜界島沖縄本島、宮古島及南大東島ニ展開ス

陸海軍ノ任務及指揮関係ハ皇土防衛要綱西部軍（第十方面軍）作戦保鎮守府間相互協定並ニ第三十二軍沖縄方面海軍根據地隊（第四海上護衛隊）間現地協定ニ據リ明確ナラシメタリ

2. 沖縄本島ニ在ル海軍部隊ノ兵力配置及指揮関係概要次ノ如シ

兵力

総員約八千

陸戦ノ訓練ヲ終ヘル戦斗員ハ二千数百名ニシテ他ハ防衛召集者、義勇等

兵器装備

十三糎以上ノ海岸砲台　約四十

高射砲　数十

高射機関砲　約百

車載機関砲　約百五十

軽迫撃砲　数十

軽機、重擲　各約二百

配置

大部ヲ以テ小禄海軍飛行場周辺一部ヲ以テ陸軍陣地内ニ展開ス

指揮関係

根據地隊司令官指揮下ノ部隊（海軍航空部隊ヲ含ム）ノ大部ハ小禄飛行場周辺ニ於テ戦斗開始ト共ニ第三十四師団長ノ指揮下ニ入ル

沖縄北飛行場地区及国頭地区ニ在ル海軍部隊ハ戦斗開始ト共ニ

夫々特設第一聯隊長及国頭支隊長ノ指揮下ニ入ル
第三四師団ノ作戦地境外ニ在ル部ノ海岸砲台ハ平時より所在兵団長
指揮下ニ入ル

十七 沖縄島民ノ處理

作戦上ノ直接的要求ハ勿論非戦斗員ノ無益ナル損害ヲ避ケ且全般
食糧問題解決ノ為ニ軍ハ昭和十九年夏以来南西諸島特ニ
沖縄島民ノ疎開ヲ強行セリ其ノ概況左ノ如シ

イ 島外疎開

軍隊軍需品輸送ノ空船ヲ利用シ沖縄島民ハ主トシテ九州ト
又宮古石垣方面ノ島民ハ主トシテ台湾ニ夫々疎開セシメタリ
戦斗勃発迄ニ島外疎開セル人員ハ前者約八万後者約二万ナリ

ロ 沖縄本島内ニ於ケル疎開

非戦斗員ノ全員島外疎開ハ軍ノ希望スルトコロナルモ海上輸送力ノ
約束ニ島民ノ不決断ニ基因シ疎開意ノ如ク進捗セズ茲ニ於テ昭和
十九年末軍ハ皇土警備要綱ノ主旨ヲモ考慮シ激戦ヲ予期
沖縄島南半部ヲ住民ヲ比較的安全ナルヘキ北半部ニ疎開
シムルニ決シ概要左ノ如ク處置セリ

イ 六十才以上ノ老人並ニ国民学校在学以下ノ小児ハ昭和二十年三月末迄ニ
北半部ニ疎開ヲ完了ス

軍ハ北行ノ空車輌及空機帆船ヲ以テ之ガ疎開ヲ援助ス

ロ 爾余ノ非戦員ハ戦斗勃発必致ト判断セラルヽ時機ニ軍命令
ヲ以テ一挙ニ北半部ニ疎開セシム

以上ノ処置ハ輸送力ノ貧弱、住宅ノ欠乏、食糧ノ取得難等幾多ノ
悪條件ニ禍ヒセラレモ軍官民ノ協力ニ依リ戦斗開始迄ニ(イ)項ニ依
リモ約三万人ノ項ニ依ルモノ亦亦略々同数ニ達セリ

十八 現地自活

イ 沖縄ハ国内有数ノ人口密度大ナル島ニシテ米ノ産額極メテ少ク農産物ノ
主体ハ甘藷ニシテ年々二十数万石ノ米ヲ台湾ヨリ移入セサルヘカラサル
状態ニアリ 従ツテ軍ハ軍自体ノ為ノミナラズ島民ノ為ニモ食糧ヲ島
外ヨリ集積スルト共ニ極力現地自活ニ努メタリ
食料ノ外自動車燃料、木造船、軽重車輌、一部薬品等ノ製造
ヲ実施セルモ資源ノ貧弱、工業力ノ幼稚等ノ為成果見ルヘキモノ

ナリ僅ニ甘サ薩ヲ材料トスルアルコール（自動車燃料）月産額三百瓩ニ達セルハ良成績ノ部ニ属ス

2. 海上交通長期ニ亘リ遮断セラルヽ場合ノ非常対策トシテハ軍官民総ヘテ甘藷ニ依存スルコトヽナレリ

本島ニ於ケル甘藷ノ生産ハ頗ル豊富ニシテ牛馬、豚等ノ家畜全部ヲ増殺シ軍官民ノ食糧トシ且之カ飼育ニ充当シアリシ甘藷モ食糧ニ転用セバ沖縄本島ニ在ル軍官民ノ現地自活ハ概ネ可能ト判断セラレタ

十九、敵情

1. 空襲

昭和二十年一月以降「レイテ」ヲ基地トスル敵B24ノ一乃至数機ヲ以テスル計画的偵察ハ連日実施セラレタリ当初偵察ノミニ任セル是等ノ敵機ハ逐次海上ニ在ル大小ノ船舶、陸上ノ自動車等ニ対シテモ徹底セル攻撃ヲ加フルニ至リ海陸ノ交通ニ至大ナル影響ヲ及ボセリ

本期間ニ受ケタル大空襲ハ次ノ如ク其ノ来襲機数ハ各々千機内外ニ達セリ然レドモ陸上ニ於ケル我カ損害ハ殆ド無ナリシノミナラズ我カ防空部隊ノ対空戦ハ漸次熟練巧妙トナリ毎回敵ニ相当ノ打撃ヲ加ヘ得タリ

昭和二十年一月三、四日

仝　一月二十、二日

仝　三月一日

2. 海上ノ状況

敵空軍ノ活動激化ニ伴ヒ敵潜水艦ノ跳梁又甚シク昭和二十年春中旬以降ニ於テハ輸送船ニ依ル本土及台湾トノ交通殆ト杜絶シ機帆船ニ依リ僅カニ小規模ノ輸送ヲ継続シ得ル状況トナレリ

3. 諜報

状況ノ緊迫スルト共ニ隆火之事件頻発シ且敵潜水艦ニ依ル潜入間諜ノ潜入説等喧伝セラレシモ各部隊及憲兵隊ノ努力ハ遂ニ確証ヲ挙グルニ至ラザリキ

二十、状況判断

昭和十九年末乃至昭和二十年初頭ニ於ケル判断

比島作戦ノ推移並ニ中部太平洋方面ヨリスル敵兵力ノ集中輸送ノ状況ト一般ノ戦略関係ニ鑑ミ敵ノ沖縄進攻ハ必ズ至ニテ其ノ時機ハ昭和二十年三月乃至五月ノ間ト判断セリ然シテ従来敵カ南西諸島ニ進攻スル場合其ノ打撃要点ハ沖縄若ハ宮古ト観察セラレアリシモ今ヤ全般ノ状況特ニ推測セラルル敵ノ作戦企図ニ鑑ミ宮古島ニハ敵ハ進攻セズトノ判断上下共ニ一致スルニ至レリ

昭和二十年二月以降ニ於ケル判断

比島作戦ノ急速ナル悪化、硫黄島ノ戦勢、敵機動飛隊ノ行動ニ敵ノ兵力集中状況等ヨリ判断シ敵ノ沖縄進攻ハ三月末乃至四月上旬ト予察セリ

主雑件

イ 軍司令部ノ移転

軍司令部ハ従来那覇首里両市ノ中間安里ノ養蚕試験所（軍司令官及軍幕僚部）及女子師範（軍各部）ニ位置シアリシカ状況緊迫ニ伴ヒ一月十五日以前者ヲ首里ニ後者ヲ津嘉山ニ移転シ戦斗配置ニ就ケリ津嘉山ノ洞窟司令部ハ既ニ概成シ首里ノ洞窟司令部ハ当時工事中ナリシモ三月末概成セリ

2. 人事異動

状況緊迫ヲ前ニシ上下三位ヨリ相当ノ人事異動アリ此ノ人事ハ戦斗上ノ要求ヲ軽視シ便宜主義ニ陥セル点カラズ軍ノ戦力ニ悪影響ヲ及ボセルコト大ナリ

戦斗開始直前ニ於ケル重要ナル人事異動左ノ如シ

軍司令部	転出	後任
航空主任参謀	釜井中佐転出	神少佐後任
作戦補助参謀	榜山少佐転出	長野少佐後任
船舶主任参謀	八橋少佐転出	不補充
軍兵器部長	梅津大佐	平間大佐後任

第六十三師団長　本郷中將転出　藤岡中將後任
歩兵第三十三聯隊長　田中大佐転出　吉田中佐後任
独立歩兵第十四大隊長　田村大佐転出
独立歩兵第十五大隊長　山本大佐転出　飯塚大佐後任
右ノ外海軍根據地隊司令官及其ノ幕僚縣知事及縣廳首脳部ニ大異動アリタリ

第三、戰斗經過ノ概要

A、軍主力方面ノ戰斗（別紙要図第四第五第六参照）

其ノ一　上陸準備砲爆撃（自昭和二十年三月二十三日　至　仝年　仝月三十一日）

一、敵ハ三月二十三日早朝ヨリ其機動艦隊ノ空軍主力ヲ以テ沖縄島ニ一部ヲ以テ南西諸島ノ各島嶼ニ来襲次テ翌二十四日ヨリ戰艦重巡各十餘隻ヲ基幹トス大艦隊ヲ以テ沖縄島ヲ包繞シ艦砲射撃ヲ開始セリ

敵ノ上陸準備砲爆撃ハ艦載機延一日千機大型艦砲発射弾一日数十万至三万発（我軍ノ概算セルモノニシテ逐日増大セリ）ノ規模ヲ以テ実施セラレ其ノ目標ハ飛行場船舶港湾次テ重要ナル中南部沿岸防禦施設ニ及ベリ

古今未曾有ノ大規模ナル砲爆撃ニヨリ全島焼土ノ如キ凄愴ナル光景ヲ呈スルニ至リシモ力不撓ノアルヲ期シ心血ヲ注ギテ構築セル洞窟陣地ニ據ル我軍ハ損害軽微ニシテ志氣愈々昂リ斗志益々熾ンナリ

二、敵ハ沖縄本島ニ対シ上陸準備砲爆撃ヲ実施スルノ間三月二十六日慶良間群島中ノ座間味阿嘉渡嘉敷ノ三島ニ上陸次テ三十一日慶伊勢列島中ノ

神山島ヲ占領セリ

慶良間群島ニ在リシ海上挺身第十ノ至第三戦隊ハ一部ノ外海上出撃ノ遑ナリ

三ヲ陸上ニ邀ヘテ戦ヲシニ十七日迄ニハ軍司令部ト通信連絡遂次杜絶シ遂ニ同群島ヲ巡視中ナリシ船舶團長以下諸隊ハ概ネ玉砕セシモノト信ゼラレタリ

神山島ニ上陸セル敵ハ十種級長射程砲七、八門ヲ展開シ連日連夜豊富ナル弾薬ヲ以テ我主陣地帯及部ニ対シ主トシテ交通遮断射撃ヲ加ヘ我軍ノ行動ヲ妨害セリ

三、軍ハ三月二十巻日ニハ敵艦隊ノ配置輸送船團ノ位置上陸準備砲爆撃ノ重点慶良間群島及神山島ノ占領其ノ他諸般ノ戦術的判断ヨリシテ敵ガ沖縄本島中南部西岸特ニ嘉手納方面ニ上陸スベシトノ確信ヲ有スルニ至レリ

沖縄島南岸湊川正面ニ対スル敵ノ策動モ亦頻リニシテ敵從来一貫上陶戦法ニ鑑ミ牽制陽動ヲ算大ナリトハ考察セルモ敵ノ有力ナル一部ガ上陸スルコトナシトハ断定シ得ズ又若シ万一上陸ニ来ル場合ニハ直接軍ノ心臓部ヲ衝カレ致命傷ヲ受クル虞レアリ

敵ガ主力ヲ以テ嘉手納正面一部ヲ以テ湊川正面ヨリ上陸スル場合敵主力ガ我ガ前進部隊ノ抵抗ヲ排除シツヽ南下シ我ガ主陣地帯ニ対シ本格的攻撃ヲ開始スル迄ハ最少限度十日ヲ要スベク万一敵ノ一部ガ其ノ主力ニ先ダシ湊川正面ヲ上陸シ来タランカ此ノ期間内コソ之ヲ各個ニ撃滅スベキ好機ナリ

依ツテ軍ハ北方陸正面ノ防備ヲ厳ナラシムルト共ニ南方湊川正面ニ上陸スル敵ヲ各個ニ撃滅スル方針ノ下ニ概要左ノ如ク部署セリ

1、混成旅団ハ湊川正面ノ配備ヲ更ニ強化ス

2、第十四師団ハ概ネ現態勢ノ儘平素計畫スルトコロニ基キ隨時湊川正面ニ攻勢ニ転ジ得ル如ク準備ス

3、軍砲兵隊ハ左記部隊ヲ湊川正面ニ転移スルト共ニ平素計畫スルトコロニ準拠シ敵ノ上陸ニ際シ橋頭堡破壊射撃ヲ準備ス

独立迫撃砲大隊（二個大隊）　両大隊共ニ砲ノ半数（三十四門）宛携行シ他ノ半数ハ全ク独立臼砲大隊ノ一聯隊ノ一中隊　第十天隊（所要ノ人員ヲ附シ旧陣地ニ残置ス

以上一部兵力部署ノ変更ハ見敵ノ牽制陽動ニ乗ゼラレタルカノ如キ観アルモ其ノ兵力移動ハ極メテ一部ニシテ北方ヘノ兵力転用ハ状況ニ合ズル如ク隨時容易ニ実行シ得ルモノナリ

四、敵ノ上陸準備砲爆撃間軍ハ予ネテノ方針基キ（切ノ敵ノ偵察陽動的
挑戦行動ニ対シ厳トシテ応戦スルコトナク以テ我ガ戦略戦術上ノ配置及
企図ヲ秘匿スルト共ニ過早ノ損害ヲ回避セリ
敵側ノ放送ニ於テ日本軍ハ沿岸戦斗ニ於テ頗ル消極的ナリトノコトアリシモ是
我ガ軍ノ遠謀深慮ヲ察セザルノ言ナリ
但シ我ガ軍首脳部内ニ於テモ大方針ヲ忘レ士気ノ勇ニ逸ランスルモノアリ
是等ノ者ヲ慰撫スル意味ヲモ兼ネテ戦車第三聯隊ノ各野砲ヲ
以テ機動独立隊ヲ編成シ沿岸近ク暴進シ来タル敵小艦艇ニ対シ
反撃ヲ加フル如ク処置セリ
其ノ二、前進部隊ノ戦斗（自四月四日 至四月五日）

四月四日
敵ハ早朝来嘉手納海岸ニ対シ徹底セル最後ノ準備砲爆撃ヲ実
施セル後、九〇〇大型舟艇一五〇隻ヲ以テ北ハ残
波岬ヨリ南北谷海岸ニ亘リ上陸ヲ開始ス
首里山上ヨリ望見スレバ北中飛行場正面一帯砲爆ノ塵煙火光
地ヲ揺撼シ天ニ沖シ光景壮絶ヲ極メ数百隻ノ敵艦船ハ沖縄
島ノ西岸ヨリ本部半島慶良間群島ニ亘ル広大ナル海面ヲ埋テ密集ス
斯クテ敵ハ一四〇〇北谷、佐久川中飛行場北飛行場ノ線次イデ夕刻ニハ
北谷、美富土、屋良、伊良皆、座喜味ノ線ニ進出ス
敵上陸正面ニ在リシ特設第一聯隊ハ北中飛行場ノ諸施設ヲ破壊シタル
後三〇〇高地第二四師団ノ陣地ニ據リ抵抗セントセシモ臨編烏合ノ部
隊ニシテ態勢ノ整理至難ナリ
又第六十二師団ノ前進部隊タル賀谷支隊主力ハ島袋附近ノ陣地ニ在リ
警戒部隊トシテ嘉手納海岸ニ配置シアリシ同支隊ノ微弱一中隊ト
時ヨリノ軍ノ規定ニ基キ特設第一聯隊長ノ指揮下ニ入リ戦斗中
ナルモノヽ如シ
敵ハ軍ノ最希望スル島尻沿岸ニ上陸セザリシハ遺憾ナルモ今回ノ敵
上陸方面ハ算ト最大ナリトシテ平時ヨリ軍ノ予期セシトコロナルヲ以テ軍事
令官以下全軍沈着冷静餘裕綽々タルモノアリ
四月二日
軍ハ急速ニ地歩ガ拡大シツヽアル敵軍ニ対シ特設第一聯隊ヲシテ極
力反撃ヲ続行セシムルト共ニ通信連絡ノ杜絶ヲ顧慮シ之ヲ国頭支

隊長ノ指揮下ニハヨシメタリ

四月三、四日

敵ハ賀岩支隊ヲ圧迫シ、南下シ漸次我カ主陣地帯ニ近接ス

四月正午頃敵ノ第一線ハ萩道、屋宜原、宜野湾北側、大山ノ線ニ賀岩支隊主力ハ大城、普天間ノ線ニ在リ

特設第一聯隊トハ通信断絶シ状況不明ナリ

四月五日

賀岩支隊ハ主陣地帯内ニ後退シ幸地附近ニ兵力ヲ集結ス

現在迄ニ支隊ノ敵ニ与ヘシ損害約千、支隊ノ死傷数百ナリ

軍ハ北正面ニ於ケル彼我主力ノ戦斗方ニ南始セラレントシ且漢川正面ニカケル敵ノ挙動ハ牽制陽動範囲ヲ出デザルヲ確認シ一時漢川正面ニ増加セシ部隊ヲ北方ニ復帰スル如ク命令セリ

其ノ三 敵ノ本格的攻撃（南始迄ノ戦斗 自四月五日 至四月十八日）

敵ハ嘉手納沿岸ニ上陸後海兵第三軍団ヲ以テ国頭方面ヲ掃蕩スルト共ニ第四師団ヲ以テ賀岩支隊ヲ圧迫南下セリ当時敵ハ我カ軍ノ企図配置ヲ察知シアラズ賀岩支隊ノ追撃ノ餘勢ヲ以テ我カ主陣地帯ニ殺到シ頑強ナル我カ抵抗ニ會シ遂ニ初メテ我カ軍ノ企図ヲ確認シ四月九日頃ヨリ約十日間我ニ局部的攻撃ヲ加ヘツヽ本格的攻撃ヲ準備セリ津堅島守備隊ハ

此ノ間伊江島及本部半島ニ在リシ国頭支隊主力ハ相次イデ守ヲ失ヒ軍司令部ニ在リテハ決戦攻勢戦略持久ノ両論対立シ（時四月八日頃）遂ニ第一部長カ一依ル夜襲ヲ以テ敵ニ一撃ヲ加フルニ止メ一般方針ハ戦略持久ニ落着セリ

四月六日

敵ハ南下ノ餘勢ヲ駆ツテ我カ主陣地帯前縁タル和宇慶南方高地我如古八五高地牧港ノ線ニ殺到シ彼我間ニ本格的戦斗展開スニ至レリ

津堅島守備隊ハ〇二三〇同島ニ上陸セル微弱ナル敵ト交戦セリ 拂暁迄ニ之ヲ撃退セリ

昭和十年初頭以来中央部ト軍トノ間ニ問題トナリアリシ決戦攻勢カ戦略持久カノ論争ハ軍主力ヲ以テ速ニ北中飛行場地区ニ出撃セヨトノ大本営及第十方面軍ノ訓電到着スルニ及ビ冷厳ナル軍ノ運命ヲ決ス

現実ノ問題トナリ緊迫セル空気軍司令部内ヲ支配セリ

軍ハ平素ヨリ戰略持久ノ方針ニ基キ決戰攻勢ハ全然準備シテ
ザリシモ中央部ノ意図ニ副フ如ク一時全力出撃ニ決シ夫々準備スルトコロアリ

機密作戰日誌

一、高級參謀ハ過去六ケ月以上不眠不休如カセシ作戰準備ヲ今轉ジテ一擲
出撃スルモ比較ヲ絶シテ優勢ナル敵陸海空軍ノ爲ニ島尻南
両郡連接部ノ狹隘地帶ニ於テ全軍数日ヲ出デズシテ潰滅スベ
キヤ明瞭ナリ到底大本營ノ希望スル敵ヲ壊滅シ若ハ北中飛行場
長期ニ亘リ制圧セントスルガ如キハ得テ望ムベカラズ況ヤ敵ノ主力ガ敵
上陸ヲ完了シ態勢概ネ整ヘリト判断セル今日ニ於テ攻勢ノ成功
算全ク絶無ナリ宜シク平素ノ方針ニ基キ戰略持久ノ態勢ヲ
持シ北中飛行場ノ制圧ハ既定ノ計畫ヘ主陣地帶内ノ長期特殊
ニ依レバ一兵モ損スルコトナク強力ナル敵ノ場合ヨリ一層長期ニ亘リ制圧
得ベシ)ニ據ルベキナリト強硬ニ主張セリ
各幕僚ハ戰勝ヲ望ミ或ハ冒頭ニ北中飛行場ノ使用不能ニ
陥ラシ全員攻勢ヲ主張ス

軍司令官、參謀長ノ眞意ハ素ヨリ窺知シ難シト雖モ全力攻勢ニ決
心セシタリ恐ラク大本營及第十方面軍ノ訓電ガ頗ル強硬ニテ殆ド
宿命的ニ依リ理論ヲ超越シ攻勢ニ決セラレタルナラン

二、軍司令官ノ決心ニ基ク軍攻撃計画ノ概要左ノ如シ

方針

軍ハ四月八日夜全力ヲ擧ゲテ攻勢ニ轉ジ上陸セル敵ヲ壊滅セシム
高二三〇高地東西ノ線ニ進出ス

兵團部署ノ概要

1、第六十二師団ハ四月八日夜全力ヲ擧ゲテ攻勢ニ轉ジ敵ヲ殺戰ニ
導キツツ先ズ島袋東西ノ線ニ進出ス
爾後ノ行動ハ狀況ニ依レモ爲シ得ル限リ一擧ニ北中飛行場方面ニ
攻勢前進スルコトヲ予期ス

2、第三十四師団ハ第二線兵団トス
四月八日夜半迄ニ第六十二師団ノ後方近ク兵力ヲ推進集結シ其後

裏前進ニ伴ヒ之ニ續行ス
第六十二師団島袋東西ノ線ニ進出スルヤ其ノ右翼ヲ超越シ深高
三二〇高地以東ノ地区ニ攻撃前進ヲ予定ス

3. 独立混成第四旅団ハ第三線兵団トス
四月八日拂曉迄ニ現在地附近ニ於テ隨時第二十四師団ニ續行ス得ル
如ク態勢ヲ整フ

4. 海軍陸戰隊ハ第四線兵団トス
四月九日拂曉迄ニ現在地附近ニ於テ隨時独立混成旅団ニ續行
シ得ル如ク態勢ヲ整フ

5. 軍砲兵隊ハ先ズ第六十二師団ノ戰斗ニ協同シツヽ逐次島袋附近ニ陣
地ヲ推進シ両師団ノ中頭地区ニ於ケル戰斗ニ協同シ得ル如ク準備ス

6. 軍司令官ハ第一線兵団ノ前進ニ伴ヒ仲間高地ニ前進ス

四月七日
軍ハ右計畫ニ基キ攻撃ヲ準備中ナリシガ軍參謀長ハ高級參
謀ノ頑強ナル攻撃反対意見竝ニ第二十四師団首脳部ノ攻撃成果ニ
関スル悲觀的意見ヲ慎重ニ再考スルトコロアリ遥々敵ノ大輸送船団
新ニ沖縄ニ近接シツヽアリトノ情報アリテ參謀長先ズ攻勢中止ニ決心シ
軍司令官モ亦之ヲ採決セリ

註
軍司令官ハ事大小トナク軍參謀長ノ意見ヲ採用セリ
大本營ニ対スル攻勢中止ノ報告ニハ敵新鋭大兵団ノ到著ヲ以テ其理由ト

四月八日
全線激戰中ナリ敵ノ攻撃ハ宜野湾街道以西ニ於テ特ニ激烈ニシテ八五
高地ハ彼我爭奪ノ中心タリ
此頃ヨリ我ガ精鋭ナル軍砲隊ハ平特ノ周到ナル射撃準備ニ基キ全面
的活動ヲ開始シテ敵ヲ威圧シ隨所ニ敵ノ攻撃ヲ阻止セリ

四月九日
神山島ノ敵砲兵ハ我ガ主陣地帯内部ノ交通遮断擾乱射撃ニ任ジ
猛威ヲ振ヘリ軍ハ独立重砲第百大隊ノ一部ヲシテ長堂附近ノ陣地
ヨリ之カ制圧ニ任ゼシメタルモ射程長大ニシテ効果揚ラズ若ニ於テ國場
河谷ニ位置セシ船舶工兵第二十六聯隊長ノ意見ヲ採用シ同聯